瀬田貞二『児童百科事典』を読み解く

町　田　り　ん

はじめに

瀬田貞二は自身の子どもの本の最初の仕事であった『児童百科事典』の前書きで「(この事典は)やさしい話から知識へ、身ぢか(ママ)な事がらから深い道理へ、応用から原理へ、読むことから考えることへの、かけ橋でなければならない」と述べ、さらに「それを興味あるすじだてによって、明瞭単純なことばで書かれること」が肝要である、言い換えれば辞典の個々の項目について、子どもに「もっと読みたい」と思ってもらえるような「楽しい読み物」的要素を加えた。

しかもそれは短絡的な面白さではなく「学問の正確さ、視野の広さ、問題の明瞭化、中心を直截簡明に表す」ことが必須条件だった。

瀬田の『児童百科事典』仕事の根底にあったものは何だったのだろうか。瀬田自身の一文によれば、戦前旧制中学夜間教師としてスタートした瀬田が、戦後、教師ではなく子どもの本の出版の分野に仕事を定めた理由は、1948年の学制改革における新制高校の教育内容に落胆したからであった。旧制高校には存在していたリベラルアーツの教育レベルを、アメリカのそれに匹敵する子どものための事典出版によって、在野の立場から補完することを考えたからに他ならない。[(1)]

瀬田はこの仕事に8年（1948~1956年）を費やした。『児童百科事典』の仕事を終えた後は20年以上子どもの文学の分野で翻訳、再話、創作、研究の仕事に全力を傾けることになる。

本論では学校教育の外にいることで瀬田が子どもの教育に果たしてきた役割がどのようなものだったのかを考察し、あわせて現代社会の学校現場と現実の子どもの状況を俯瞰しつつ、子どもの読書が子どもをめぐる今日的諸問題をどう補完できるのか探っていきたい。

1　総索引から読み解く

『児童百科事典』第24巻総索引の「まえがき」は次のように始まる。

「この事典を編集するにあたって、わたしたちが目標としたのは、個々の知識をバラバラに、ただよせあつめてならべるというのでなしに、まとまった、系統だった理解がえられるようにしたい、ということだった。あなたがたが、単なるもの知りになるのでなく、いきた知識を、いつも活用できるように身につけてほしい、ということだった。大項目を中心として立て、わりに小さいことがらは、より大きいまとまったことがらのなかにふくめてあつかうようにしたのも、箇条書きふうでなく読物としてすらすらしまいまで読めるようにくふうしたのも、この努力のあらわれにほかならない。」[(2)]

上記の趣旨に添って、総索引では「巻別総項目表」「部門別項目表」「見るページ・たのしむページ」の順に掲載し、そのあとに「索引」を配している。

(1)　部門別項目表を読み解く

部門別項目表は24部門に分類し、そこに掲載された項目数はおよそ2000にのぼる。

1　思想・心理　66項目
2　宗教　49項目
3　教育　33項目
4　政治・法律　60項目
5　経済　52項目
6　社会　69項目

7　歴史　272 項目
8　地理　225 項目
9　民族・民俗　77 項目
10　家族　69 項目
11　レクリエーション　56 項目
12　文学　104 項目
13　美術　119 項目
14　音楽・演劇　69 項目
15　コミュニケーション　55 項目
16　農林・水産　64 項目
17　工業・技術　164 項目
18　地球・天文　103 項目
19　数学　26 項目
20　物理学　90 項目
21　化学　101 項目
22　生理・医学　83 項目
23　動物　316 項目
24　植物　179 項目

上記の部門の分けかたについて、解説には次の２点を掲げている。

①「部門の立てかたは、げんみつな学問的な根拠にしたがったわけでなく、むしろ常識的な分類にとどめた。そのほうがじっさいには、かえってつかいよいだろう。」(3)

②「項目の性質から、あるいはそのとりあつかいが総合的なため、内容がいくつかの部門にまたがっていて、どれか１つの部門だけに、はめこんでしまえないばあいがある。このようなときは、項目名をそれぞれの部門にくりかえしのせ、そのうちいちばん比重が大きいと思われる部門では太字に、ほかの部門では細字に組んで区別した。」(4)

たとえば、歴史の部門､「考古学、貝塚、土器、埴輪、古墳」などは太字､「人、民族、奴隷、駅、宣教師、修道院、封建社会、城、寺院、僧、関所、都市、海賊、伝記」などは細字である。

子どもの興味に即して部門を分け、関連する項目も掲載することで、子どもが物事のつながりを予測したり想像することを楽しみ、探究心が自然に身に付くような配慮が伺える箇所である。視野の広さが自然に培われるような、工夫と願いが込められている。

⑵　索引を読み解く

索引の本文は 24 巻 43 ページから始まるが、その使い方については次の三つの項目を立て解説している。

①「ひくまえに」
②「索引をひいてみて」
③「本文をひらいてみて」

それぞれの解説を考察すると次のようになる。

①「ひくまえに」

瀬田は索引をひく前に、この事典と索引の特徴を以下のように述べている。

「…さて、なにか知りたいことがらがあって、それを索引でひいてしらべようというときは、**そのことがらをあらわすことばを、いくらか整理、選択する必要**がある。…

あることばでひいて、索引のなかに見つからなかったら、ちがったいいかたを考えるか、そのことがらをふくむもっと一般的なことばをさがして、ひきなおしてほしい。

…索引の見出語は、そうとうこまかくとってある。極端な例をあげれば、本文に項目として立っている‘重力’とならんで、重力異常、重力計、重力測定、重力分布、重力変化などといったことがらが、それぞれべつにとりあげられている。だから、知りたいと思うことがらは、かなり正確に、えらびだすことができる。…じぶんのさがしていることがらを、索引の見出語のなかにうまく見つけだしたときも、それだけでおえてしまわずに、そのまわりにならんでいる見出語もいくつか目をとおしてほしい。」(5)

瀬田と共に編纂に関わった松森務は、「瀬田さんの構想は役に立つだけでなく「楽しい事典」を作ることだった。偶然めくったページに思わず読みふけってしまうような、宿題をこなすために、いやいやひいた項目から、その文章や挿絵に好奇心をそそられて、志を呼びおこされるような、そんな事典が作りたい、ということだった。…次代を担う生徒や学生に、筋の通った生きた学問の楽しみを知ってもらいたい、と瀬田さんは情熱をこめて下中

局長に語った…」[6]

瀬田は「偶然めくったページに思わず読みふけってしまう」「宿題をこなすために、いやいやひいた項目から、その文章や挿絵に好奇心をそそられて、志を呼びおこされる」そんな事典だからこそ、まず索引をひくまえに「**そのことがらをあらわすことばを、いくらか整理、選択する必要**」があることを教え、細かくとった見出語をどんどん続けて読んで行ってほしいと述べている。そのための工夫が索引の項目の立てかたにも現れているのである。

②「索引をひいてみて」

「索引をひいてみて」では、実際に索引を活用するにあたって知っておくべきルールを、6つの項目をたて具体例を提示しながら解説し、ここにも子どもに事典の使いかたを丁寧にひもとく瀬田の配慮が感じられる。

❶アイウエオ順に

「…★★★日本の市名は、―シとつけてならべる。したがって、たとえば、山形市は山県有朋や山形県よりもあとになる。しかし大阪、広島などのように、本文に項目としてのっているばあいや、とくに現在の市としてよりも、むしろ歴史上の地名として重くあつかわれている地名のばあいには、見出しのカタカナの部分では‘シ’をはぶき、漢字の最後に細字で（市）をつけてしめした。このときは、ならべる順序が、シをつけたばあいよりも少しまえになる。」[7]

たとえば索引で「ヒロシマ」とひくと以下のようになる。

ヒロシマ　広島（市）19－20～22
　原子　　7－274/275（1）
　世界大戦、第2次　　12－181
　広島県　　19－28
ヒロシマケン　広島県　19－22～30

「ヒロシマ」の項目では見出語として「原子」「世界大戦、第2次」「広島県」を掲げている。「それだけでおえてしまわずに、そのまわりにならんでいる見出語もいくつか目をとおしてほしい」と子どもを道案内する瀬田の心遣いである。

❷ページをめくるとき

❸ならんだことばのいみ

見出語から一字引っ込んで並んでいるのが、その見出語の事が掲載されている場所となる。以下の例を参照されたい。

サンタクロース
　クリスマス　　7－80左

これは、サンタクロースのことは単独では載っていないけれど、第7巻‘クリスマス’の項目、80ページ左段にのっているということでを示している。

❹本文に項目があれば

上述のサンタクロースは独立項目として立っていないので細字で表されている。

❺＊のいみ

ページ数の後に＊がついているのは、イラストや写真がついている事を示している。

❻→のつかいかた

→は以下の例のように、→の先に示した見出語でひきなおしてみてほしいという指示である。

マンシュウ　満州　→　東北地区
　世界大戦、第2次　　12－158右
　中国　14－21左
　日清・日露戦争　　16－245右
トウホクチク　東北地区
　中国　　14－31右
トウホクチホウ　東北地方
　日本の地理　　16－258左、273右

③「本をひらいてみて」

「…見出語にあがっていることばが、…それからあと、なんページにもわたって、そのことばがくりかえし出てくることも多い。…

★指示された場所に、索引の見出語がでてこないで、かわりに、意味はおなじだが、べつのことばが出ているばあいがある。これは、まえにのべたように、いくつかのいいあらわしかたを、1つのことばにまとめて指示したためである。

また、指示された場所に、見出語も、それをいいかえたことばも、見出されないこと

がある。しかしそこを読んでみれば、そのことがらについての説明がのっていることがわかるだろう。この索引では、ことばよりも内容を重んじるたてまえをとった。」(8)

以上瀬田による総索引の解説をひもといてみた。瀬田は読み手の子どもが根気よく索引を活用できるよう、途中で投げ出さないように、配慮を重ねて子どもが事典の使い方をよく習得するように子どもを導いている事が解る。

高桑弥須子は学校図書館司書の実践に基づいた著書のなかで「小学校図書館6年間でこれだけは！」という図書館利用指導の目標を表にして掲載している。そこでは百科事典と索引巻の使い方は小学校中学年から高学年にかけて習得させたいとしている。(9)

高桑弥須子

表1　小学校図書館6年間でこれだけは！

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
レファレンス図書館上手は訊き上手	わからなかったら聞いてみる	調べたいことをはっきりさせる 上手に訊くためには、自分が調べたいことをはっきりさせておく。担任の先生とよく相談することが大切 何がわからないのかわからない。どうしたいのかわからない。そんなときははじめに戻る	
分類記号（NDC） 日本十進分類法 上位概念下位概念	本のなかまわけ ・本は0から9のなかまにわかれている ・絵本は丸い色シール ・正しい場所に返す	なかまわけの数字には意味がある！ 「4」は自然科学、動物や植物、自然界のこと。 「9」は文学	3つの数字にも意味がある 粗→細→目と順に細かく分かれていく （中学校でも日本中のどこの図書館でも同じ分類記号で、同じように探せることのありがたさ！）
	本は、正しい場所にもどす		
目次・索引・検索	国語辞典 図鑑 ・目次を見る ・索引をつかう	百科事典と索引巻のつかいかた・年鑑など多種多様な辞事典の使い方 インターネットを使ってみる	
	国語辞典を使うことに慣れる		

統計・図表・写真を使うときのチェックポイント	絵や写真、統計資料等を注意深く見る　出所を確かめる	
	絵や写真を注意深く見る いつ、どこで、誰が描いた？誰が撮った？	地図・統計集など参考資料を使う ・統計資料は年度・調査機関を確保する *図表・写真は伝える人の考えを映して、いかようにも色付けできる。*統計数字は作られもする
著作権など（引用・出典・参考資料一覧） 奥付の見方	自分の考え？誰かの考え？「この本に書いてありました」「お母さんに聞きました」「テレビで見ました」などを添えて発表する	著作権を侵害してはいけない ・他人の作ったものを自分のものといっしょにして発表してはいけない ・本も音楽もインターネットも、むやみにコピーしてはいけない
		出典をあきらかにする…引用 ・参考資料一覧 ・誰に聞いたか、何で知ったか ・書名、著者名、出版社、何ページなどをメモする ・雑誌名、新聞名、パンフレット題名などをメモする ・インターネットのサイト名と目次をひかえておく
情報モラル	情報はすべて「人」が発信するものその場に応じた対応を	
	名前は大事 ・名前や住所を不用意に他人に教えない 友だちを大切に	ネット社会の歩き方 ・・・とっても怖いネット世界!! ・携帯メールのつかいかた ・ネット社会のルールとマナー ・人を尊重する ・対応は敬意をもって ・ネット上のやりとりも相手は「人」

「調べ学習」という言葉が教育の現場に登場したのは、いわゆる「ゆとり教育」が学校教育に導入された2000年以降だった。知識の詰め込み教育から、子どもが自ら主体的に学ぶ力を培う教育への転換を目的として総合学習をカリキュラムに導入し、関連して「調べ学習」のための事典や書籍が多く出回るようになっていった。『児童百科事典』は、そのおよそ半世紀前に瀬田の願いで実現した、パーソナルな〈総合学習のための事典〉であったと言えよう。

事典を使いこなすのは、図書館を使いこなすように一定の訓練が必要である。小学高学年から中学生の子どもが、この分厚い『児童百科事典』を読みこなし使いこなせるようになった時には、文献検索の初歩を習得したと言っても良いだろう。瀬田は学校の外、主と

して家庭生活のなかで日々子どもの成長の糧となるような事典の出版を半世紀前に、それも高いレベルで実現したといえるのではないだろうか。

昨年3月11日に東北地方を大震災と津波が襲った。時代は動き復興を両肩に担う子どもの将来にむけ、今一度瀬田の仕事を再考したい。児童百科事典の「まえがき」で、瀬田は次のように述べている。

「日本のつきあたっているむつかしい情勢や、新しい問題は、考えようによっては、あのフランス革命以上である。かりに教育の一事をとりあげても、社会の秩序や学問の組織の上に築かれなければならない社会科やホーム・ルームの試みは、おびただしい努力をつんで空廻りしているかに見える。そのままでは、全ての生徒、学生は、年々学力を低めて新しい世界を作る列から離れて行くことだろう。

実際にいって、これらの若い人たちは、教科書に追いつくようにその場限りの参考書や、冷淡な辞書にすがりついているばかりだった。いままでの百科事典が、正確で、学問的で、すべてに触れていたにしても、特別な研究家のほかは、とりつくしまのない、味気なさをなめなければならなかった。

もし、ここに、若い人たちが偶然めくったページに読みふけってしまうほどの、おもしろい百科事典があったら、また、いやいや勉強のために引いた項目から、すぐさまはげしい好奇心をそそられ、志をよびさまされるほどの、たのしい百科事典があったらどうだろう。家にも、学校にも、図書館にも、目にふれ、手にとれるところに、そのような百科事典を送りたいものだ。」[10]

50年経過した現在の日本において、この瀬田の言葉が新しい意味合いをもって我々に問いかけている。

2　本文を読み解く

『児童百科事典』のはじめの項目は「**アイコクシン**　愛国心」で、次の項目が「アイスクリーム」である事は、両者のコントラストの妙味がこの事典の特徴をよく現しているとして、取り上げられる事の多い部分である。「愛国心」の項目は次の文章ではじまる。

「愛国心は人間の歴史とともに古く、また歴史とともに、いろいろ変化してきている。‘歴史’と‘自然’とは、人間がもっているいちばんすぐれた先生であるが、これからその‘歴史’という先生に、愛国心の意味をたずねることにしよう。」[11] そして世界史の流れに添って、「愛国心の芽生え」「ポリスの愛国心」「王国の時代」「ラ・マルセイェーズ」「力ずくの愛国心」について解説し、最後の「新しい愛国心」では次のように結んでいる。

「太平洋戦争の結果、めざめたアジアの諸民族は、つぎつぎに民族国家をうちたてて、世界からもみとめられるようになった。インド、ビルマ、フィリピン、インドネシアなどである。アジアの民族運動はこれからもまだつづくにちがいない。このような愛国運動はなかなかおさえつけることのできないものである。これにたいして、武力をたのみにするような愛国心は、もはや害があるだけだ。人間の歴史は、ちいさなひとかたまりの人々の共同生活から、何千万という人々を統一する近代国家にまで発達した。やがては全世界の人々をむすびつけるしくみもできることだろう。そのときには、愛国心は世界の人々をつつむ人類愛にまで成長することだろう。」

『児童百科事典』が出版された1951年当時、国民学校で終戦を迎えて戦後を歩みはじめた子ども達は新制中学生になっており、隣国は朝鮮戦争の渦中だった。戦中は少国民として、教育を受けていた。その子ども達にむけて出版されたのが児童百科事典である。最初に「愛国心」をもってきたことには意味がある。敗戦からの復興の途上のなかで中学生になった、元軍国少年・少女たちとともに、もう一度、世界の歴史から「愛国心」という考え方の変せんをたどってみようという瀬田ならではの教育観を強く示した項目である。瀬田は「愛国心」の考え方は歴史の中で変化しているこ

とをのべ、あくまでも〈歴史〉と〈自然〉を深く探求する事で、子ども達が自分自身で「愛国心」という言葉が世界の人々に与えてきた意味を考えるよう導いている。

そして次の項目「**アイスクリーム**」は、「どんな好ききらいのはげしい人でも、アイスクリームのきらいな人は、まずあるまい。あまくて、舌のうえでトロリと溶けるあの味は、子どもにもとしより（ママ）にも好かれて、しかも滋養に富んでいる。」とはじまる。アイスクリームの歴史も詳しく述べて、更に簡単な作り方まで掲載。「アイスクリームもシャーベットも家庭ですぐ作る事ができるから、作ってみたらどうだろう。デパートなどで家庭用のフリーザーも売っているが、なくても適当な大きさの桶とブリキ製の茶筒などで代用させることができる。まず、よくまぜあわせた原液を茶筒にいれ、それを桶の中央にすえ、冷凍させるために鶏卵大にくだいた氷に、氷の重さの約1/3ほど塩をまぜて茶筒のまわりにつめる。氷と塩とをまぜると、温度は、−20℃にも下るのである。…茶筒を代用させたばあいは、たえず手でこれをまわしていなければいけない。アイスクリームを作るひけつは、この原液をたえまなしにかきまぜることで、そのままではバターにしまうおそれがあるし、あのネットリした、とろけるような美味をうまくだすことができない。」と結ぶ。

「愛国心」から「アイスクリーム」、「アイスランド」、「アイソトープ」、「愛知県」と続くなかで、文章は、あたかも博識のおじさんや近所のお兄さんが子ども達に話してきかせているような語り口で、面白い読物のようであり、情景が浮かんでくるのである。「もし、ここに、若い人たちが偶然めくったページに読みふけってしまうほどの、おもしろい百科事典があったら」という瀬田の意図は本文のなかでも活かされている。

3　学校教育における国語教育・学校以外での文学教育

⑴ 1960年代の文学教育

瀬田は『岩波講座　現代教育学８　芸術と教育』「2 文学」のなかで学校教育における国語教育の目的と文学教育の違いについて、国語教育は日本語の文章の聞き・話し・読み・書く技術の指導に重点を置き、文学の特別な働きを教育的に認めていないように思われると述べている。[(12)(13)]

当時の高等学校学習指導要領では国語教育の目標を「生活に必要な国語の能力を高める」「目的や場に応じて正しく的確に理解し表現する態度や技能を養う」「国語を尊重し、その発展に寄与する態度や習慣を身につけさせる」とし、「文学作品の指導にあたっては、教師の好みに片寄って、狭い学習にならないように注意する」ことを新たに改訂草案に盛り込んでいる。

では、文学教育は学校と学校外でどのように住み分けしたらよいのだろうか。瀬田は国分一太郎による文学教育の以下に掲げた６つの目的について⑴と⑹は学校における文学教育であるとし、⑵〜⑸を一括して子どもの心性の発達に大きな意義を持つものとして、教科外でおこなわれる文学教育だと考えた。

⑴文学についての教育…文学の本質、種類、歴史などの確かな理解。
⑵文学鑑賞の方法・技術、態度・能力の教育…文学というものをどう読むか、その鑑賞のしかたを鍛えること。
⑶文学的認識、文学的思考、物事の芸術的・形象的なとらえ方の教育…芸術としての文学作品の認識の方法を鍛える。
⑷文学美の教育…芸術的な趣味や美的興味を高める。
⑸文学を通しての教育、文学作品を用いての正しいモラルの教育…文学作品を通して、ものの見方、考え方、感じ方を豊かに、新しくし、人間らしい生き方を探求させる。
⑹国語教育としての文学教育…優れた文学作品に接しながら言葉の教育を行う。

瀬田は⑵〜⑸は国分のようにきっちり仕分けられるものではなく、例えば⑷の趣味とい

う言葉も、「生活に根付かないアクセサリーのような遊びごとではなくて、一生かかって蓄積した教養の総和、人間全体の奥ゆきから引き出される美的な決定権という⑸におけるモラルと別物ではありえない。⑵⑶に⑷⑸が流れ込んでくる。」と述べている。[14]

そして、エーリッヒ・ケストナーの以下の論考を引用しながら文学教育の本来の意味に言及している。

「子どもの知性は学校で伸ばす事ができるし、子どもの身体はスポーツできたえることができる。ところで、子どもの心にある第三の力、これが残念なことに世間で全く無視されている。その結果、それはひどく損なわれてしまった。だから長いこと、子どもたちに、子どもの未来に、つまりまた人間社会にとって、おそろしい結果が現れてきている。使われないでしぼんでしまった第三の力とは―空想力（想像力）のことだ。ほかの面には知性を働かせているのに、空想力を枯らせ、よどませたために、ひとが公私両方の生活をすっかりぶちこわしていて気がつかないこと、おどろくばかりだ。…問題はこうだ。子どもたちが全部持っていて私たちおとなにはせいぜい芸術家と発明家と庭師しか持っていない、第三の力…空想力を、子どもに正しく助長してやらなくてはならない。」[15]

瀬田は「文学が成り立つのは、作者の想像力（イマジネーション）の働きであって、読者がその場にいあわせたように鮮明でぬさしのできない心象（イメージ）を与え、読者はそれによって強い情感をかきおこされるものだから、文学教育の具体的な目的を、むしろ想像力の伸長におくほうがいいと思う。」と述べて、ケストナーの考えに賛同している。

瀬田は、「想像力」はせまい特別な感覚主義につれこむものではないとし、「むしろ、人間の内部にあるあらゆる音階を自由にたたき出す能力、物事の背後にあるあらゆる隠れた意味を一挙につかみ出す能力、あるいは定型化し、停滞する現状をたえず新しく構築していく能力」で、知育と相反するものではなく、子どもの心を刺激し、物事への活発な興味をおこさせるものであるという。そしてそれは「意識にものぼらない奥のほうで、ゆっくりとにじみ、積み重なって、やがて成年の安定した人格となっていく」もので、「ことに敏感な感性をもち、ゆたかな空想力に恵まれている子どもという時期に、見て測れないこの力をおとなが根気よくつちかうことを怠ったてはならない」と述べ、学校教育とそれ以外の場での、想像力を培う文学教育の大切さを力説した。

⑵　現代の文学教育

3.11後の日本では、清水真砂子が2011年10月24日岩手県盛岡市における講演のなかで「チェルノブイリ事故で人間はパンドラの函を開けてしまったにもかかわらず、その後私たちには思考停止期間があった。なめられても仕方が無いほど私たちは思考停止だったし、うかれ、便利さを享受していた。勉強しようと思えばいくらでもできた。私たちはやろうとしなかった。だからといって免責される訳ではない。」と述べ、想像力が欠如していた自らの世代に深い反省の言葉を投げかけた。さらに一挙に社会の矛盾が吹き出したかに見える震災後の時代の文学について、「小説とは、生きている事に意味があるか、わからないから書く（ベンヤミン）。しかし、子どもの文学は、生きている事に意味があるという前提に基づいている。今、私たちはむしろ解りにくさに耐えるエネルギーが必要ではないか。」と訴えた。[16]

瀬田の言葉を借りて言えば、次のような答えが返ってくるのではないだろうか。「子どもの文学と大人の文学（小説）とは、原則の上で同質であって、文学上の値打ち、芸術上のきまりが別ではない。けれども、子どもがそれを理解し、味わい、共感するための用意が、子どもの文学には必要である。子どもの読み方感じ方は、これから築きあげる経験世界へ太く直接に無意識に反応する。そして、新しい視野がひらけ、新しい印象を受けて考えが広まった事を意識的の分析する事なく（でき

ず)、「おもしろかった」「楽しかった」とだけ言う。」[17] 瀬田は子どものための文学は、ドストエフスキー、ジイド、プルースト、ジョイスのように行かず、キプリング、スティーブンスン、デフォー、昔話のようにいくという。今子どもの文学に求められているのは、文学の太い水脈に支えられた真に「おもしろく」「楽しい」物語ではないだろうか。

平成10年（2008年）に公布された新学習指導要領のなかで、国語「C読むこと」[18] から目標のいくつかを抜き出し、これらの目標について、瀬田の論評と照らしてみると、1960年代に瀬田が述べていた、学校教育とそれ以外の場所、家庭、図書館などでの文学教育の住み分けは、若干様変わりし、学校教育が歩み寄っているかのように感じられる。

〔小学校低学年〕

楽しんだり、知識を得るために本や文章を選んで読む。

本や文章を楽しみ想像を広げながら読む。

読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりする。

〔小学校中学年〕

場面の移り変わりに注意し、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて想像しながら読む。

記録や報告の文章、図鑑や事典などを読んで利用する。

必要な情報を得るために、読んだ内容に関連した他の本や文章などを読むこと。

〔小学校高学年〕

目的に応じ本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫する。

登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめる。

伝記を読み、自分の生き方について考えること。

課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用。

編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読む。

中学校

〔第1学年〕

文章の構成や展開、表現の特徴について自分の考えをもつ。

文章に表れている見方・考え方をとらえ、自分の見方考え方を広くする。

本や文章から必要な情報を集める方法を身に付け、目的に応じ情報を読み取る。

様々な種類の文章を音読したり朗読したりする。

文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読む。

課題に沿って本を読み、必要に応じて引用して紹介する。

〔第2学年〕

抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読む。

文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつ。

多様な方法で選んだ本や文章から適切な情報を得、考えをまとめる。

詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流する。

新聞やインターネット、学校図書館等を活用して得た情報を比較する。

〔第3学年〕

表現上の工夫に注意して読む。

論理展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方を内容理解に役立てる。

文章を読み比べ、構成や展開、表現の仕方について評価する。

目的に応じ、本や文章を読み、知識を広げ自分の考えを深める。

自分の読書生活を振り返り、本の選び方や読み方について考える。

上記の抜粋からも解るように、新学習指導要領では子どもの主体的な読書の過程でもたらされる「気付き」を重んじる教育の姿勢が打ち出され、そのための学校図書館と学級文庫の充実、家庭への働きかけは今後一層必要になってくると思われる。

4　結論

瀬田が編纂した『児童百科事典』が当時と同じように、高い理想を掲げてふたたび子どものもとへ届けられたら、自ら考えて成長しようとする子ども達にとって、それがどれだけ楽しく役に立つ読みものになるだろうと、この事典の大幅な改訂の労を、いまこそ買って出る時ではないかと勇み足ながら思わずにはいられない。

盛岡大学図書館所蔵の『児童百科事典』の内容について、昨年に続き僅かではあるが掘り進める事ができ、更にこの事典が3.11後の日本の子どもたちにとって、真に彼らの糧になる「おもしろい」読みものとして、再び活かされることを切に望むものである。

---

(1) 斎藤惇夫『子どもと子どもの本に捧げた生涯』キッズメイト、2002年、182～185頁（『新選日本児童文学3現代編』小峰書店、1959年、解説抜粋）
(2) 『児童百科事典』第24巻　平凡社、1956年、3頁
(3) 前掲事典第24巻、3頁
(4) 前掲事典第24巻、3頁
(5) 前掲事典第24巻、40頁
(6) 松森務「児童百科事典の頃」、「子どもの館」福音館書店、1979年、12月号、瀬田貞二追悼号、9～10頁
(7) 前掲事典第24巻、40頁
(8) 前掲事典第24巻、41頁
(9) 高桑弥須子『学校ブックトーク入門―元気な学校図書館のつくりかた』教文館、2011年、12頁
(10) 『児童百科事典』第1巻　平凡社、1956年、まえがき
(11) 前掲事典第1巻、1頁
(12) 『岩波講座　現代教育学8』岩波書店、1960年、128頁
(13) 瀬田は当時の高等学校の国語科の新しい学習指導要領および改訂草案の目標を引用している。
⑴生活に必要な国語の能力を高め、言語文化に対する理解を深め、思考力・批判力をのばし、心情を豊かにして、言語生活の向上を図る。
⑵経験を広め、知識を求め、教養を高めるために、また、思想や感情を人に伝えるために、目的や場に応じて正しく的確に理解し表現する態度や技能を養う。
⑶ことばのはたらきを理解させ、国語に関する知識を高め、国語に対する関心や自覚を深めて、国語を尊重し、その発展に寄与する態度や習慣を身につけさせる。
（文部省初等教育局『高等学校学習指導要領』第二章第一節より）
文学作品の指導にあたっては、教師の好みに片寄って、狭い学習にならないように注意する。
（文部省初等教育局『高等学校学習指導要領改訂草案』第二章第一節より）因みにこの草案を土台に1960年施行の指導要領第2章第1節国語第2款現代国語（読むこと）には、「文学作品の指導は、片寄ったり、狭くなったりしないように注意する。」とあり、草案における「教師の好みに」というところのみが削除されている。
(14) 前記（12）前掲書、132頁
(15) エーリッヒ・ケストナー『わたし自身』瀬田貞二訳、国際青少年図書館編「国際少年図書館と児童美術」所収、1953年
(16) JPIC清水真砂子講演会、岩手県地域交流センター・アイーナ、2011年9月
(17) 前記（12）前掲書、139頁
(18) 「学校指導要領 第1節 国語第2 各学年の目標及び内容」文部科学省、2008年
以下は「C読むこと」全文
小学校
〔第1学年及び第2学年〕
C　読むこと
⑴　読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。
ア　語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。
イ　時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。
ウ　場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。
エ　文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと。
オ　文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。
カ　楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと。
⑵　⑴に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
ア　本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読むこと。

イ　物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること。
ウ　事物の仕組みなどについて説明した本や文章を読むこと。
エ　物語や、科学的なことについて書いた本や文章を読んで、感想を書くこと。
オ　読んだ本について、好きなところを紹介すること。

〔第３学年及び第４学年〕

C　読むこと

⑴　読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。
ア　内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。
イ　目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。
ウ　場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。
エ　目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。
オ　文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。
カ　目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと。

⑵　⑴に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
ア　物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。
イ　記録や報告の文章、図鑑や事典などを読んで利用すること。
ウ　記録や報告の文章を読んでまとめたものを読み合うこと。
エ　紹介したい本を取り上げて説明すること。
オ　必要な情報を得るために、読んだ内容に関連した他の本や文章などを読むこと。

〔第５学年及び第６学年〕

C　読むこと

⑴　読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。
ア　自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。
イ　目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。
ウ　目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。
エ　登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。
オ　本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。
カ　目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと。

⑵　⑴に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
ア　伝記を読み、自分の生き方について考えること。
イ　自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること。
ウ　編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。
エ　本を読んで推薦の文章を書くこと。

中学校

〔第１学年〕

C　読むこと

⑴　読むことの能力を育成するため、次の事項について指導する。
ア　文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解すること。
イ　文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などとを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること。
ウ　場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。
エ　文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。
オ　文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くすること。
カ　本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること。

⑵　⑴に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
ア　様々な種類の文章を音読したり朗読したりすること。
イ　文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと。
ウ　課題に沿って本を読み、必要に応じて引用して紹介すること。

〔第２学年〕

C　読むこと

⑴　読むことの能力を育成するため、次の事項について指導する。
ア　抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読むこと。
イ　文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に

役立てること。

ウ　文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。

エ　文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと。

オ　多様な方法で選んだ本や文章などから適切な情報を得て、自分の考えをまとめること。

⑵　⑴に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること。

イ　説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること。

ウ　新聞やインターネット、学校図書館等の施設などを活用して得た情報を比較すること。

〔第３学年〕

C　読むこと

⑴　読むことの能力を育成するため、次の事項について指導する。

ア　文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと。

イ　文章の論理の展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること。

ウ　文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。

エ　文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。

オ　目的に応じて本や文章などを読み、知識を広げたり、自分の考えを深めたりすること。

⑵　⑴に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　物語や小説などを読んで批評すること。

イ　論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読むこと。

ウ　自分の読書生活を振り返り、本の選び方や読み方について考えること。